

2023 年度Ⅱ期 個人企画

番号	氏名	渡航先	国・地域	渡航先での受入期間
1	M・M	グラスゴー大学 医学部	イギリス	2024/3/4～2024/3/29

令和5年度岸本国際交流奨学金による海外活動実施報告書

医学部医学科	5年	学籍番号：*****	氏名：M・M
--------	----	------------	--------

渡航先国：イギリス
受入機関名：Glasgow university
渡航先機関での受入期間： 令和 6年 3月 4日 ～ 令和 6年 3月 29日 (26日間)

・はじめに

この度「英国大学医学部における臨床実習のための短期留学」を通じてグラスゴー大学血液内科に留学し、Glasgow royal infirmary 及び Beatson West of Scotland Cancer Center にて1か月の実習を行う機会を頂きました。血液内科についての知識を深めるのみならず、日本と全く異なる文化・社会背景、そして異なるシステムで動く英国の医療を身をもって体感できたことは私にとって非常に貴重な財産となりました。自分の経験がこれから留学をされる皆様の参考になれば幸いです。

・志望動機

自分がこのプログラムを知ったのは5年生の4月と、他の参加者の方々に比べかなり遅かったと思います。自分はインターナショナルに活躍できるような人材になりたいという思いが強く、さらに医療行政やシステムにも興味があったため様々な角度から日本及び世界の医療についての見識を深めたいと思い選考に応募すること決めました。大阪大学は比較的カリキュラムが柔軟で、6年次に3か月間の選択実習の中で海外実習・地域実習・研究など自分の興味に応じて選ぶことができます。私はこのカリキュラムを利用して英国スコットランド・イングランド、アラブ首長国連邦でそれぞれ1か月ずつ医療を学び、以前とは違う視点で日本の医療を見つめなおすことができるようになったと思います。

・選考

選考は①学内の書類および面接での選考③医学教育振興財団の書類選考④医学教育振興財団の面接という3段階の選抜となっていました。自分は今まで海外滞在経験がほとんどなく、英語力には全く自信がありませんでした。あまり応募までの準備期間がなかったこともあり、IELTSの点数を取るのにも苦労しましたが、何とか目標の点数を取ることができほっとしたことを覚えています。最後の医学教育振興財団の面接は御茶ノ水で行われました。過去の参加者の報告書には面接の多くが英語で行われるとの記載があったのですが、

実際には自分の面接は全て日本語で行われ、かなり動揺しました。後に他の参加者の面接についての話を聞いたところ、ほとんどの方が日本語のみだったそうです。御茶ノ水での面接は、2つの部屋に2人ずつの先生がいらっしゃり、それぞれ10分間程度質疑応答を行うという形でした。

・渡英準備

自分は帰国子女でないどころか海外滞在経験すらほとんどなかったため、英語の勉強には多くの時間を費やしました。医療英語の知識及び読解に関しては USMLE Step 1 を通して学習を行いました。これについては多くの方がブログや note を介して情報発信をしているため詳細についてはここで述べませんが、学習を通して臨床医学英語のベースが身につく英国実習でもとても役に立ったので、興味がある方はチャレンジしてみても良いかもしれません。しかし、英語でのコミュニケーションについてはそもそもの経験が少なかったためかなり苦労しました。これを克服するためにオンライン英会話に登録し、ひたすら講師とのディスカッションを続けました。プログラムへの採用が決まってからの手続きとしては application form の提出、旅行保険及び医療過誤保険の加入、感染症抗体価の証明、犯罪経歴証明書の提出、寮の手配等があります。この中で特に大変だったのは犯罪経歴証明書の提出です。これは発行までの時間もかなり時間がかかり、提出に際するルールも日本とイギリスで異なるためかなり戸惑いました。保険についてはおそらく大体の医学部生が加入しているであろう学研災が使える部分もあるので一度生協等で尋ねてみることをお勧めします。感染症抗体価の証明は6か月以内のものを提出する必要があるため、自分は大学のキャンパスライフ健康支援・相談センターに頼んで有料で検査をしてもらいました。VISA については elective program を含む短期滞在において、日本国籍を持っている人は特に提出を求められませんでした。

・実習について

実習は基本 Glasgow Royal Infirmary にて 9:00~17:00 で行われ、タスクが少ない金曜日はたまに早めに終了するという形でした。まず初日に驚いたことは、Glasgow Royal Infirmary には血液内科専門の病棟がないということです。この病院では取り扱う疾患は良性疾病が多く外来での診察がメインで、悪性疾患の患者は Queen Elizabeth University Hospital や Beatson West of Scotland Cancer センターで診ることになります。かといって全く入院患者を診ていないわけではなく、各病棟に血液疾患を持った患者が常に10人ほど点在しており、そのような患者を管理するという形でした。私が実習をしていた時にはコンサルタントが5人、レジストラが4人勤務をしていました。



↑ Glasgow royal infirmary の外観

スケジュールは各週で異なりますが、大体以下のような内容でした。

	午前	午後
月	Sickle cell disease clinic	Lecture
火	Lymphoproliferative clinic	North sector MDT
水	Non-malignant hematology clinic	Resident teaching
木	Bone marrow biopsy	Thrombophilia clinic
金	Morphology teaching	off

これに追加して随時病棟回診、ティーチングイベントへの参加、レジストラと一緒に骨髄塗抹標本を顕微鏡で観察をするなど不定期のイベントが入るという形でした。隙間の時間もありましたが、翌日の予習や復習などをしてしていると時間に余裕はあまり無く、暇だと感じることは少なかったです。自分はレジストラと同じ部屋に一月間デスクを割り当ててもらえたので、そこで勉強しているときもレジストラや上級医にすぐ質問をすることができ、環境としてはとても恵まれていたと思います。具体的な実習内容は上の表で分かるように外来診療がメインで、指導医の先生と一緒に患者さんを診ます。毎回患者さんが入室する前に先生と患者さんの概要を把握し、試問やディスカッションを行った上で患者さんを診ることができたので毎回の外来がとても勉強になりました。口頭試問の際は今まで学んだ知識が遠く離れた異国の地でも通用していることに何とも言えない感動を覚えました。医学は世界共通だと感じた瞬間でした。外来ではコンサルタントのみならずレジストラも基本一人で患者を受け持っており、外来集合後は紅茶やコーヒーとともに昼食をとりながらそれぞれの症例についてディスカッションとフィードバックを行うという形式になっていました。このカンファレンスでは全員が電子カルテの方を向いてといった形ではな

く、全員で円を囲んで双方向に発言するという形でした。このカンファレンス中にもコンサルタントがレジストラに時折試問のようなことをしており、レジストラの教育にも重点を置いていることが伺われました。また個人的にとっても勉強になったのは、日本ではなかなか見ることができない **Sickle cell disease** の外来です。イギリスでは近年移民が増加していることから、グラスゴーにおいてもこの疾患の患者数が増加しています。特に

Hematology-obstetrics の外来では **Sickle cell disease** 患者の周産期管理について深く学ぶことができとても勉強になりました。外来のシステム面でも日本と違うところがいくつかありました。スコットランドでは **COVID** 以降、来院することが困難な場合や対面での診察が不必要だと思われる場合は両者の合意の下で電話での外来診察が可能となっており、日によっては 2 割ほどの患者が来院せずに診察を終えていました。これに関しては当然患者と医療機関両者にメリットがある場合も多いかと思いますが、先生曰く患者の希望と病態のミスマッチが起こることもあり、適切な運用が必要だとおっしゃっていました。ただこのシステムを導入したことによって **COVID** の影響が残る状況でもスムーズな外来を継続できていたということは確かでしょう。また、医療費が原則無料の **NHS** 特有の問題として、外来の予約をしても患者が実際に病院に来ないことが日本に比べ多いと感じました。僕の体感ですが大体 10 人の内 2~3 人は来院せず、これは経済的な観点からもかなりの損失になっているそうです。

3 週目は自身の希望もあり、主に悪性疾患を扱う **Glasgow** 西部の **Beatson West of Scotland Cancer Center** にて実習をすることができました。午前中は上級医の先生やレジストラ、**Glasgow university** の医学生らと回診等を行い、午後は **clinic** という形の実習が多かったです。また、自分は英国の医療制度や社会体制に関心があるということをあらかじめ先生に伝えていたためか、外来の間の空き時間などで **NHS** の医療体制やグラスゴーの医療課題についてお話を聞かせてもらったり、逆に日本の医療体制について話し合ったりする機会を頂きました。英国の医療を知り、日本の医療を見つめなおす良い経験を得ることができたと思います。

・現地での生活

自分は **Murano street student village** という学生寮に滞在をしました。1 つとても残念だったのは、短期滞在ということもあってか自分は完全に他の学生と分けられたスタッフ用の建物に一人で生活することになったことです。ただ、キッチンも完備されていてとても快適ではあったので、それはそれで自炊をしながら楽しい生活を送ることができました。グラスゴーは英国屈指の大都市なので外食をするとかなりの値段がかかりますが、スーパーなどで食材を買えば日本と同程度の値段で済ますことができるので、余裕がある方は現地特有の素材での調理を楽しんでみることもおすすめです。学生寮から病院までは **8km** ほどの距離があったので自分は **First bus** の学生 1 カ月定期券をアプリで購入し通院していました。これによりグラスゴー市内全体をかなり費用を抑えて移動して回ることができたの

で、宿泊場所と病院に距離がある場合は購入することをお勧めします。また、グラスゴーでの生活で最も大変だったことは、現地のアクセントに順応することです。グラスゴーはスコットランドの中でも特にアクセントが強いことで有名で、初日に現地の方と話したときに絶望したことを覚えています。徐々に耳が慣れて少しずつ聞き取れるようになっていったことは確かですが、グラスゴーでの実習を考えている方は少し YouTube 等でアクセントに慣れてから渡英することをお勧めします。土日についてはエディンバラやロンドンなど各都市に遊びに行ったのですが、特にスコットランド北部の自然が豊かな地域をめぐるバスツアーがとても感動的でした。ハグリッドの家やジェームズ・ボンドの故郷として有名なグレンコー、ホグワーツ特急で有名なグレンフィナンはとても美しかったです。また、現地でお世話になった先生方がとても親切にしてくださり、おいしいスコットランド料理店やパブに何度も連れて行ってくださったため、スコットランドの文化を深く味わうことができました。

・グラスゴーの健康格差と医療制度

グラスゴーでの実習を通して最も衝撃を受けたのはグラスゴー市内の健康格差の大きさです。グラスゴーは最も裕福な地域とそうでない地域の格差が大きく、その健康寿命にはとても大きな隔たりが存在します。さらにその差は現在も広がり続けていると言われていいます。この問題は BBC でも記事になるほど大きな問題としてとらえられているので、興味がある方はぜひ記事や論文を読んでみて欲しいです。アメリカのような保険制度の国家で地域ごとに平均寿命に大きな差があるという話は渡英以前にも聞いたことがありますが、イギリスのような、NHS の下で全国民が基本無料で医療を受けられる国家においてこれほどまで寿命に差があることは私にとっては衝撃的でした。

・最後に

1 か月という短い期間でしたが、イギリスの臨床現場を体験することで多くの事が見えてきました。イギリスの医療システムを学ぶことはもちろん、改めて日本の医療を見つめなおすきっかけも得ることができ、大変貴重な経験をする事ができたと心の底から感じております。ご支援をしてくださった岸本忠三大阪大学名誉教授、応募から派遣までサポートしてくださった医学教育振興財団の皆様、大阪大学医学部医学科教育センター・教務課の皆様、大阪大学学友会の皆様、Glasgow royal infirmary 及び Beatson West of Scotland Cancer Center の先生方には厚くお礼申し上げます。この経験を糧に日本及び世界の医療に貢献する人物に成れるよう、さらに精進してまいります。